

ライティング徒然草

エグゼクティブ・アドバイザー 林 健一

第21回 2万6千本のガラス!?

前回に引き続いて修飾語を使うときの留意点を取り上げる。今回もまた、最初に紹介するのは朝日新聞のコラムである。出典は2024年4月5日の夕刊に掲載された「取材考記」で、「対馬の分断 過疎地への核ごみ 手法に限界」という見出しがついている。これは高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分場を選定する仕組みを問題視したもので、「自治体が手を挙げれば交付金を出す」という政府の姿勢は過疎地に分断をもたらすというのが要旨である。このコラムには以下のような文章が記載されていた。まずは下線部に注意しながらお読みいただきたい。

原発が主に都市部の電力需要を賄って半世紀余り。約2万6千本のガラスで固めた核のごみが出る計算になる。原発の賛否を問わず、どこかに処分先を見つける必要がある。

初めて読んだとき、私は下線部の意味を理解することができなかった。「約2万6千本のガラス」という表現にひっかかったのである。「～本」と表記しているのであるから、ガラスは棒か筒のような形状なのであろう。しかし、そのような形状の物質で核のごみを固めることが可能なのか。しかも、なぜそれが2万6千本も必要なのか。コラムにはガラスに関する説明がないため、突如登場した大量のガラスに戸惑い、この先を読み進めるのが困難になった。

その後、何度か文章を読み返した結果、私は自分が思い違いをしていたことに気づく。「約2万6千本の」という修飾語は「ガラス」ではなく、「核のごみ」にかかるのである。すなわち、どのようなガラスかは不明であるものの、とにかくガラスで固めた核のごみは「～本」と表記できる形状になり、それが約2万6千本も出る。記事はそのことを問題視したのである。そうであれば、ここは書き直すほうがよい。修正案を以下に示す。

下線部の修正案

ガラスで固めた核のごみが約 2 万 6 千本も出る計算になる。

この例からわかるように、修飾語は適切な位置に記載することが必要で、位置が適切でない
と、読者に混乱をもたらすことになる。例をもう一つ示す。こちらの出典は「世にもあいまいなこ
とばの秘密(川添愛, ちくまプリマー新書)」で、著者の川添愛氏は言語学者である。この本は
誤解を招きやすい日本語表現を集めたもので、その中には以下の文が記載されている。

この映画は 1920 年代にアメリカで起こった事件を映画化したものです。

この文の問題は「1920 年代」が映画の製作時期と事件の発生時期のどちらを指すのかが
わからないということで、著者はそれぞれのケースに応じた修正文を提案している。それらを以
下に示す。修飾語の位置を変えると、曖昧さが消えることを実感していただきたい(注:「映画」
という言葉が繰り返されるが、修正文は原文のまま記載した)。なお、原著では「従属節の境界
にある表現が曖昧さをもたらす」という観点でこの例を挙げているが、ここでは単に「修飾語の
位置」という観点で話を進める。専門的な解説にご興味のある方は原著をご参照いただきた
い。

修正文 1: 1920 年代に映画化した場合

この映画はアメリカで起こった事件を 1920 年代に映画化したものです。

修正文 2: 1920 年代に事件が起こった場合

この映画はアメリカで 1920 年代に起こった事件を映画化したものです。

同様の問題は医薬品の承認申請資料でも見かけることがある。具体例を以下に示す。

承認申請資料の例: 原文

担当医師は 2 週間ごとに 4 段階であらかじめ設けられた基準に従って被験者の
〇〇症状の程度を判定した。

この例では「2 週間ごとに」「4 段階で」という修飾語がどこにかかるのかがわからない。たとえば、「あらかじめ設けられた」にかかると解釈することも可能である。すると、判定基準が 2 週間ごとに検討され、その検討が合計 4 段階に達したという意味になってしまう。しかし、医薬品の承認申請資料で判定基準を設定するまでの苦労を強調することはまれである。おそらく、実際には〇〇症状の程度を 4 段階で判定し、その判定間隔が 2 週間だったのであろう。そうであれば、「2 週間ごとに」「4 段階で」は「〇〇症状の程度」の近くに置くほうがよい。あわせて、「あらかじめ設けられた基準に従って」の位置も見直すことにする。修正案を以下に示す。

承認申請資料の例:修正案

あらかじめ設けられた基準に従って、担当医師は被験者の〇〇症状の程度を 2 週間ごとに 4 段階で判定した。

では、なぜこのような問題が生じるのであろうか。これまでに示してきた例を見る限り、どうやら我々には「修飾語が頭に浮かんだら、その時点で書いてしまう」という習性があるようである。なぜなら、どの例でも修飾語が適切な位置よりも前に記載されているからである。つまり、頭の中では、本来のあるべき位置よりも早く（本来記載すべき位置よりも前に）修飾語が浮かんできてしまうようなのである。

ではどうするか。「頭の中で考え直し、適切な位置を見つけてから修飾語を書く」というのも一つの解決策かもしれない。しかし、そうすると、文を書くのがものすごく遅くなる。さらに言えば、たとえ時間をかけたとしても、頭の中で適切な位置を見つけることが本当にできるのであろうか。適切な位置は、ワープロや紙の上で文字にしない限りわからないのではないか。

ということで、私がお勧めしたいのは「修飾語が頭に浮かんだら、まずはそのまま文を書く。そのうえで書いた文を見直す」ということである。修飾部分が長くなったときの留意点は前回のコラムにまとめたので、そちらをご参照いただきたい。今回お伝えしたいのは「短い修飾語でも、位置が不適切だと誤解を招く恐れがある」ということである。そして、修飾語の適切な位置を学ぶうえで「世にもあいまいなことばの秘密」の例文（1920 年代にアメリカで起こった事件を映画化）はとても参考になる。ご紹介した修正文を記憶にとどめていただければ幸いである。

追記

最初に紹介した例で朝日新聞の記者が主張したかったのは「核のごみが大量に生じるので、処分場を見つけなければならない」ということで、どのような物質で核のごみを固めるかは主張と

無関係である。そうであれば、単に「約 2 万 6 千本の核のごみが出る計算になる」と書けばよく、むしろこのほうがわかりやすい。このように、修飾語を使ったら、「その修飾語は本当に必要か」という視点で文を見直すことも必要である。

次に、修飾語が必要となった場合でも、「その修飾語は本当に適切か」という視点で文を見直すべきである。電気事業連合会のホームページによれば、核のごみを廃棄する際には、高レベルの放射能をもつ廃液を蒸発濃縮した後、溶融したガラスと混ぜ合わせてからステンレス製の容器に流し込む。すると、冷えた廃液が固体化する（出典：https://www.fepc.or.jp/nuclear/haikibutsu/high_level/index.html）。そうであれば、「約 2 万 6 千本のガラスで固めた核のごみ」よりも、「約 2 万 6 千本のステンレス製容器に入った核のごみ」のほうが、処分場の必要性を理解してもらいやすいはずである。